

京都 だより Kyoto Dayori

【特集】京都府の民家

中川 等（大阪産業大学デザイン工学部准教授）

2019年 1月号 第1回「丹後型（広間型）の民家」

2019年 5月号 第2回「北山型と摂南型の民家」

2019年 9月号 第3回「南山城型（四間取り型）の民家と町家」



KYOTO SOCIETY OF ARCHITECTS & BUILDING ENGINEERS

一般社団法人 京都府建築士会

<https://www.kyotofu-kenchikushikai.jp>

(一社)京都府建築士会

丹後型(広間型)の民家

中川 等



なかがわ・ひとし

大阪産業大学デザイン工学部准教授
京都市文化財マネージャー育成実行委員会委員
NPO法人古材文化の会副会長
NPO法人文化財修復構造技術支援機構理事
河内いへ・まち再生会議理事
専門／建築史、居住文化史
著書／『伝統的都市集住環境の空間秩序生成に関する研究』(共著)など

一 民家と地域性

伝統的な民家は一般に庶民の住まいのことをいい、地域の風土や生活、生業にかなった間取り、構造、意匠、材料が長年にわたって発展定着して、地域の環境の中で一定の合理性をもち、また独自の文化を形成した。民家の普請は、地元の職人が地元の人材と技術をもって行うことが原則であった。その結果、民家は地域により独自の特徴をもち、その特徴の有無によって一つの地域性を形成した。

民家の外観は、草葺の場合、広く全国に寄棟造がみられるが、近畿地方には入母屋造が多く、比較的せまく限られた地域に切妻造が分布する。岐阜県白川郷・富山県五箇山の合掌造は、切妻屋根の妻面に窓を開けて通風採光をはかり、屋根裏で養蚕を行った。奈良県・大阪府とその周辺の高塀造は、切妻屋根の妻壁を塗り籠めて上端に瓦

を2列ほど葺き、竈のある土間部分を瓦葺の落ち棟につくり防火構造をととのえた。瓦葺の民家は、全国にさがかけて18世紀初期頃に近畿地方で現れた。瓦葺の利点は耐火性と防火性にあり、民家の構造が重たい瓦屋根を支持できるほど頑丈になったことや、軽量で簡便な棧瓦が発明されたことも瓦葺の普及をうながした。材料を自給できる草葺や板葺と異なり、瓦は専門の業者から購入しなければならない。近畿地方の中央部では、綿や菜種など商品作物の栽培と河内木綿、奈良晒の生産などにより比較的早くから貨幣経済が浸透し、そのことが瓦葺が普及する重要な要因となった。

屋根のかたちと入口の関係には、平入と妻入という区別がある。建物の棟と平行な面(平)に入口を設けるものを平入、直角な面(妻)に入口を設けるものを妻入と称する。平入の民家は広く全国にみられるが、妻入の民家は特定の地域に分布している。たとえば、五箇山の合掌造、摂津から丹波西南部・山城中部の摂丹型、若狭から丹波東部・山城北部の北山型、湖北から越前の余呉型などである。

民家の平面は、基本形式として整形四間取り、前座敷三間取り、広間型三間取りに分類される(図1～3)。4つの居室を田の字形に配する整形四間取りが全国的によく知られているが、近世初期までさかのぼるとその分布は近畿地方の中央部に限られ、近畿の周縁地域には前座敷型、それ以外の東北、関東、中部、山陰などの地域には広間型がみられた。前座敷が左右2室、あるいは広間が前後2室に仕切られると四間取



図1 整形四間取り

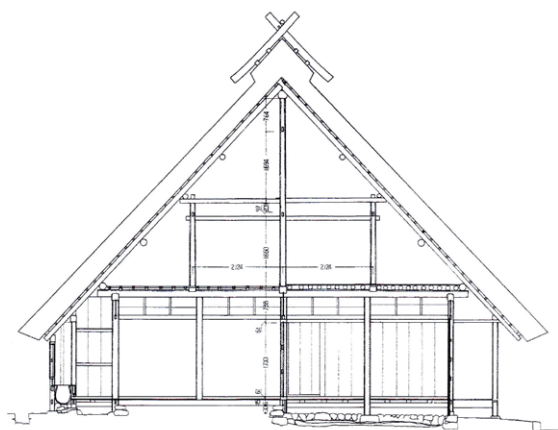


図5 棟束組
(重要文化財石田家住宅修理工事報告書)

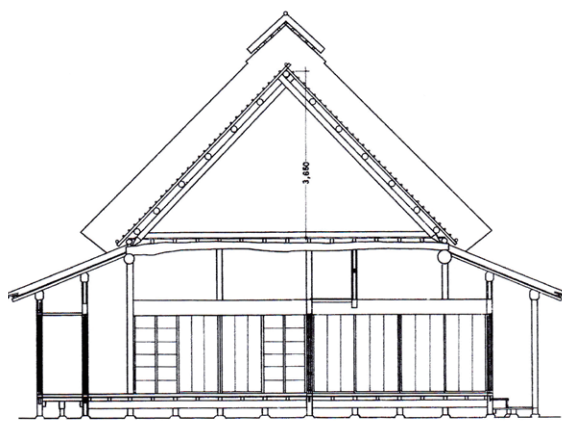


図4 棟束組
(重要文化財中家住宅修理工事報告書)



図3 広間型三間取り



図2 前座敷三間取り

りになるが、過渡期には室境が食い違う四間取りも現れた。整形四間取りの民家が広く普及するのは18世紀中頃以後と考えられている。

柱の配置と間隔を決める方法は、おおむね東日本は柱割り、西日本は畳割りを基本とする。柱割りは、柱の心々距離すなわち1間の長さを基準とするもので、1間の長さは5尺6寸から7尺ぐらいまでさまざまである。畳割りは、一定の大きさの畳を基準として各室の大きさを決めるもので、京間の畳は長さ6尺3寸、幅3尺1寸5分、京都から西へ広く分布した。東への広がりには滋賀県中部まで、名古屋を中心とする地域には、中京間と称する長さ6尺の畳、岐阜県北部から富山県、石川県には長さ5尺8寸の畳が多い。

民家の屋内で火を焚く場所には囲炉裏と竈があり、両者ともほぼ全国的にみられるが、東日本では囲炉裏、西日本では竈が主役である。囲炉裏は、炊事、採暖、照明など多様な役割をもち、湿度の高い日本では乾燥の場としても有用であった。竈は、とくに近畿地方の中央部で発達し、ごはんや副食、飼料、湯など加熱するものに応じて大きな異なる焚口を勾玉形に並べた大型の竈が普及した。囲炉裏と竈の位置関係は、気温の低い地域で両者が近づき、暖かい地域で離れる傾向が認められる。

かつての農村では牛や馬を飼う家が多く、東日本では馬、西日本では九州南部をのぞいて牛を飼育することが一般的であった。近年になって耕耘機と自動車普及するまでは、水田の耕作や荷物の輸送に牛馬の力を借り、また田畑の肥料に牛馬の糞尿を活

用するなど、人畜共同の暮らしが営まれてきた。牛馬を飼育する内厩はふつう土間の前隅に設けられた。

座敷まわりは、自然環境を背景とした地域性より、社会的・経済的な要因で形成される面が大きい。とくに書院造風の座敷は、近世初期の上層民家において主屋とは別棟で建てられることが多く、それが次第に主屋の中に取り込まれた。主屋の座敷はもともと先祖の霊をまつる室であり、次第に床・棚・書院など接客空間として整備され、近代以後は意匠や材料が多彩になり趣向が凝らされた。

民家の構造は、草葺屋根を支える技法について2形式に分類される。太い斜材を合掌形に組んで棟木を支える扱首組は広く全国に分布し、棟木をたてて棟木を支え棟木から軒桁に太い垂木を架け渡す棟束組は近畿地方周縁部の古民家にみられる(図4・5)。瓦葺屋根の構造は和小屋を基本とし、しばしば登り梁を用いる。

軸組の構造は、居室境の中柱を省略するために成の高い差鴨居で柱間を固めることが多いが、差鴨居の導入は近畿地方で17世紀初期、関東地方で17世紀後半以後である。基礎まわりは、近畿地方の民家では礎石建を基本とし、江戸時代を通してほとんど土台をいれないが、東日本では19世紀中頃より土台をまわすようになる。構造技法の分布と変遷において、東日本と西日本ではいくつかの相違があるようだ。

伝統的な民家は、地域の環境と共生し、暮らしの文化と技術を受け継いできたことがわかる。

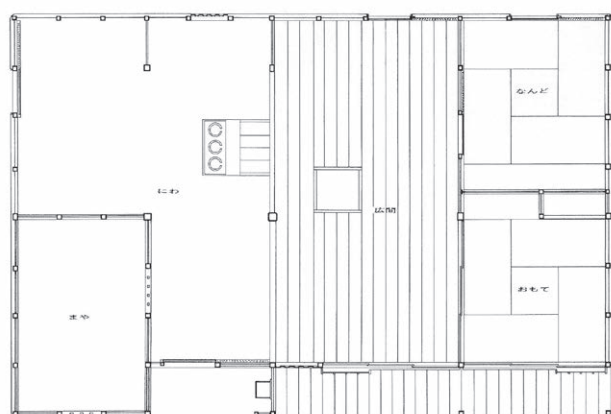


図8 旧丸岡家住宅平面図
(加悦町指定文化財旧丸岡家住宅移築復原工事報告書)

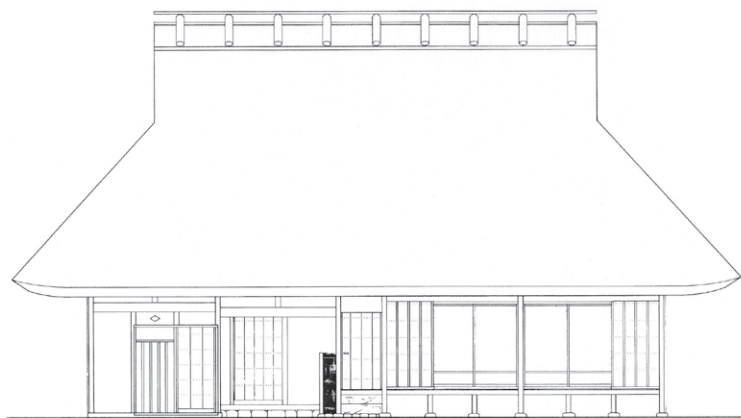


図7 旧丸岡家住宅復原正面図
(加悦町指定文化財旧丸岡家住宅移築復原工事報告書)



写真2 行永家住宅外観



写真1 旧永島家住宅外観

一 京都府の民家

京都府の民家は、地域的に丹後型（広間型）、北山型、北船井型、摂丹型、南山城型（四間取り型）に分類され、さらに町家を加えて6形式からなる（図6）。

丹後型（広間型）は、山陰地方から丹後全域・丹波西北部に分布する。平入で、土間に面して梁行いっぱいの広間を設け、上手に座敷と部屋を並べる。農家には内厩があり、漁家にはない。

北山型は、若狭から丹波東部・山城北部に分布する。妻入を本来とし、棟行方向に食い違う四間取りを基本とする。床上は座敷・下の間・台所・部屋からなり、前面に土間と内厩を並べる。土間は狭く、古くは上げ庭で、壁は板壁を用いる。

北船井型は、丹波中北部に分布する。北山型の一系統だが、平入・妻入ともにあり、整形四間取りとし、土壁を用いる。

摂丹型は、摂津から丹波西南部・山城中部に分布する。妻入で、縦半分を土間とし、土間に沿って座敷・台所・部屋を一列に並べる平面を基本とする。座敷の前面に縁側、土間の前隅に内厩を設ける。

南山城型（四間取り型）は、河内・大和・伊賀から山城南部に分布する。平入で、床上は座敷・下の間・台所・部屋を田の字形に配する。土間は広く、台所の土間側に広敷、土間の前隅に内厩や機屋を設ける。

町家は、京都の市中と府下の城下や街道筋にみられる。商人や職人などの住まいで、表通りに面して軒を連ねて町並みを構成する。敷地は間口が狭く奥行の深い形状で、通り庭に沿って店・台所・奥座敷を並べる

平面を基本とする。
次に、それぞれの民家形式の建築的特徴について詳しくみてみよう。

一 丹後型（広間型）の民家

外観は入母屋造・平入・草葺で、積雪の多い気候風土に応じて屋根は急勾配である（図7）。その傾向はとくに山間部の民家に顕著で、投首の長さを梁の5分の4とする勾配が標準という。正三角形に近いかたちで、合掌造民家などと並んで全国でもっとも勾配の強い屋根の一つである。葺き材は、すすきや麦藁のほか、カヤと称して熊笹がしばしば用いられた。葉がついたまま葺くので、素朴な味わいの外観になる。棟は杉皮と竹で覆う形式が古く、時代が下がると箱棟も散見する。とくに山間部の民家では、冬になると軒先までユキガコイ（雪囲い）を設けて外回りを包み込む。雪国らしい民家景観である。

丹後地域では、ほかに草葺屋根を切り上げて庇をめぐらせ、その間に小窓を開いた民家がみられる。江戸後期以後の養蚕家屋の造りで、天保10年（1839）の旧永島家住宅（京都府立丹後郷土資料館／もと京丹后市丹後町／府指定文化財）はその初期の建物である（写真1）。丹後縮緬の発祥・隆盛を背景にして養蚕を行う民家が増え、土間の一部や部屋の上に中二階をつくり小窓を開いて換気採光をはかった。与謝野町加悦には、古風な瓦葺の主屋や土蔵、縮緬工場などが残り、丹後縮緬の製織町として特色ある町並みを伝えている（重要伝統的建造物群保存地区）。



写真5 行永家住宅の土間梁組

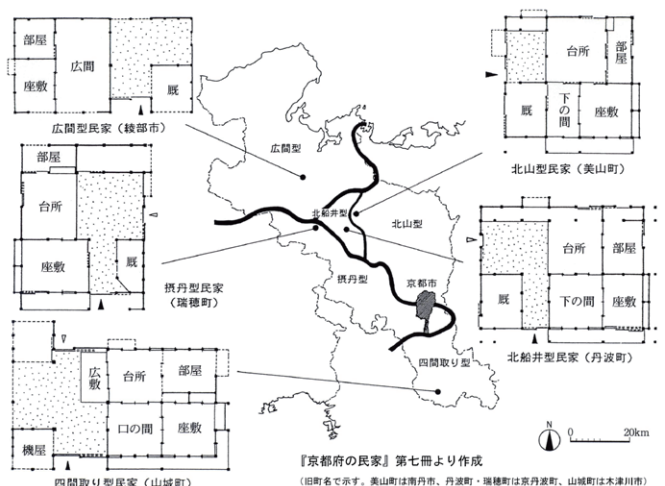


図6 京都府の民家分布



写真4 旧永島家住宅の広間天井



写真3 旧永島家住宅の広間と座敷

丹後の農村部で、瓦葺の民家が現れるのは19世紀に入ってからである。文政8年(1825)の行永家住宅(舞鶴市/重要文化財)がその初期の建物である(写真2)。入母屋造・棧瓦葺で、四面に棧瓦葺の庇をまわし、軒裏は漆喰で塗り込め、軒下の壁は柱をみせる。

平面は土間に面して梁行いっぱい、の広間を設け、上手に座敷(おもて)と部屋(なんど)を並べる広間型三間取りを基本とする(図8)。江戸末期以後、広間は次第に前後に二分され四間取りに移行するが、土間沿い二室の間仕切りは鴨居の下あるいは上下に障子建てるだけで小壁をつくらない簡単な形式が多い。建具を撤去すれば前後二室は空間的に一体化し、広間型の伝統を受け継いでいることがわかる(写真3)。

広間はずもとと板敷で、日常生活や作業など多機能に使用された。広間にはしばしば囲炉裏を切り、またロクタイと称して土間に一段低く小さな板間を張り出して竈を築いた。炊事や食事など屋内生活の大部分は広間に集約され、火処の周囲に家族が集まって冬を暖かく暮らしてきた。

座敷は仏壇を構えて先祖をまつる室で、後には床・棚・書院など座敷飾りを加えて接客空間として整備された。部屋は就寝や収納に使用され、古くは座敷境を土壁で閉ざすなど閉鎖的に仕切られた。土間は前隅に内厩をつくり、後寄りに竈や流しなど炊事設備を配した。

屋根の構造は、草葺では扱首組、瓦葺では和小屋あるいは登り梁を用い、軸組の構造は、居室境を成の高い差物(ヒラモン)で固めた。広間の天井は矩形断面に仕上げ

た大小の梁を半間ごとに格子状に組み、また端部が鉄砲の柄のように曲がった大きな梁(鉄砲梁)を用いるなど見応えのある架構を展開した(写真4)。土間は太い梁を縦横に掛け、とくに梁行・桁行に3本ずつ6本の太い丸太梁を曲がり具合に応じて上下に交差させて組んだ梁組は六本組と称され、その系統の豪壮な梁組は舞鶴大工の伝統の技として受け継がれた(写真5)。構造に意匠として技巧を凝らすことは丹後型民家の特徴の一つである。

古い遺構が少ないことも丹後型民家の注目される点である。確実に17世紀にさかのぼる民家は残っておらず、18世紀初期頃のもの最古である。その頃に建てられた民家には、近郷で初めての礎石建てで、見物に来る人が多かったと伝える旧家がある。当地域で礎石建てが普及し始めたのは江戸中期と思われる、それ以前は掘立柱が一般的であったらしく、そのため古い遺構が少ないのであろう。

漁村の住まいも農家と同じく広間型系統の建て方であるが、漁家ではふつう内厩がなく、ほぼその分だけ土間が狭くなっている。伊根町伊根浦は、湾を囲む山々が海に迫り、海際に舟屋が連続して建ち、山側に主屋や土蔵などが並ぶ漁村景観を伝えている(重要伝統的建造物群保存地区)。舟屋は、切妻造・妻入・棧瓦葺の建物で、かつては草葺で、1階は舟揚げ場、2階は漁網置き場であった。干満の差が少ない穏やかな海湾口の青島、湾を囲む魚付林など周辺環境とともに独特の歴史的風致を保っている(写真6)。



写真6 伊根浦の漁村景観

●おもな参考文献

- 『京都府の民家 調査報告 第一冊～第七冊』京都府教育委員会、1966～75
- 大河直躬他『日本建築史基礎資料集成21 民家』中央公論美術出版、1976
- 林野全孝『近畿の民家』相模書房、1980
- 関野克監修『日本の民家1～8』学習研究社、1980～81
- 『加悦町指定文化財旧丸岡家住宅移築復原工事報告書』加悦町教育委員会、1994
- 『京都府指定有形文化財旧永島家住宅』京都府立丹後郷土資料館、1995
- 『重要文化財行永家住宅修理工事報告書』京都府教育委員会、2002
- 『伊根浦伝統的建造物群保存対策調査報告書』伊根町・伊根町教育委員会、2004
- 『加悦町加悦伝統的建造物群保存対策調査報告書』加悦町、2005

北山型と摂丹型の民家

中川 等



写真1 石田家住宅の外観

一 北山型の民家

北山型の民家は、若狭から丹波東部・山城北部にかけて分布する。外観は入母屋造・妻入・草葺で、平面は棟行方向に食い違う四間取りを基本とする。床上は座敷・下の間・台所・部屋からなり、前面に土間と内厩を設ける。土間は狭く、古くは土を床高近くまで盛り上げた「上げ庭」であった。内厩は下の間と直に接していたが、時代が下がると両者の間に土間が通り、平入に転ずる。

慶安3年（1650）の石田家住宅（南丹市美山町／重要文化財）は北山型最古の民家である（写真1）。文化13年（1816）の小林家住宅（南丹市美山町／重要文化財）と比較すると、江戸前期から後期に至る北山型の変遷を知ることができる（図1・2）。160余年の間に、妻入が平入に、上げ



なかがわ・ひとし

大阪産業大学デザイン工学部准教授
京都市文化財マネージャー育成実行委員会委員
NPO法人古材文化の会副会長
NPO法人文化財修復構造技術支援機構理事
河内いえ・まち再生会議理事
専門／建築史、居住文化史
著書／『伝統的都市集住環境の空間秩序生成に関する研究』（共著）など

庭が平土間に、柱の新仕上げが鉋仕上げに、食い違い間取りが整形間取りになり、納戸構え（敷居を一段高くした袖壁付き板戸片引き）がみられなくなった（写真2）。また、小林家住宅では床上部が拡張整備され、表側の座敷は3室を並べ、前面に幅1間の広縁を設け、必要に応じて広縁にも畳を敷いて接客空間に取り込んだという。

軸組の構造は、棟通りに柱を密に建て、平面を大きく左右に二分することが特徴である。石田家住宅では、ほぼ半間間隔に柱をたて貫で固め、台所・座敷境と台所・下の間境の片引き戸及び内厩・土間境の半間以外はすべて板壁で閉ざしており、内部空間を左右に分離する傾向が顕著である。

屋根の構造は、棟束をたて、棟束の中程から両脇の母屋束の頂部へ繫梁を渡して組み固める「おだち・とり組」を基本とする（図3）。石田家住宅は「おだち・とり

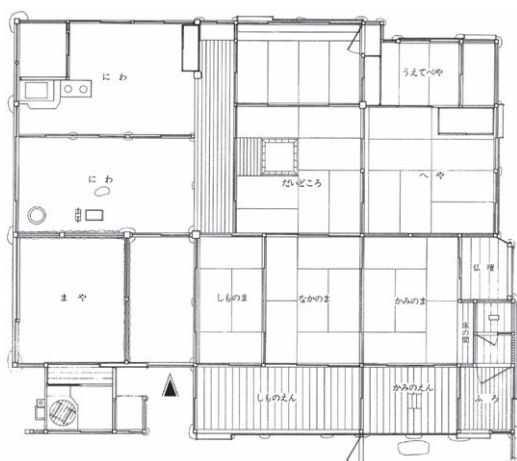
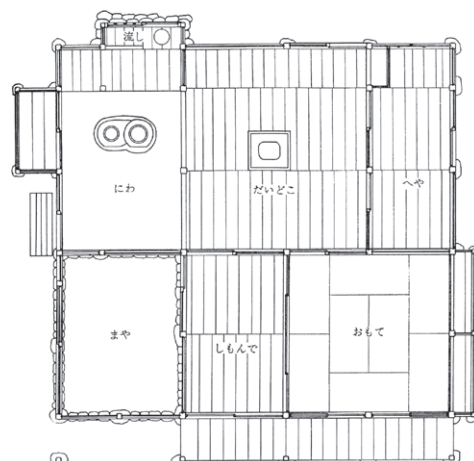
図2 小林家住宅平面図
（日本の民家3）図1 石田家住宅平面図
（日本建築史基礎資料集成21 民家）



写真3 美山町北の集落景観



写真2 石田家住宅の納戸構え

い組」であるが、石田家に匹敵する古い民家に、内部の3本の柱が繋梁の位置までたち上がり、それらが2間の梁を支えて梁上に短い棟束を立てる構造がみられる(図4)。「おだち・とりい組」の母屋束が柱につながるならば、棟束もその可能性があり、より古い形式として棟持柱構造が推定される。棟通りで平面を二分する空間構成は、北山型の起源に関わる伝統かもしれない。江戸後期になると、小屋裏の作業の邪魔にならないように、母屋束を垂木に沿って斜めに立てる手法が現れる(図5)。この母屋束を上までのばして扱首を組むと、扱首・棟束併用形式となる。

ところで、江戸中期に建物の梁間規模に関する法度が幕府より出された。新規に建てる場合は梁間3間に限るという家作禁令である。当地域では、大半の民家が4間梁あるいは3間梁である。4間梁の民家は本家筋が多く、ふつう江戸初期にさかのぼる由緒をもつ。北山型の祖型が棟持柱構造であるならば、棟通りを中心として対称形に柱を配置する構造が想定される。家柄の古い民家が梁間4間となることは首肯される。一方、3間梁の民家は分家筋が多く、しばしば江戸中期以後の分出である。梁間制限の影響を受けたものと考えられる。

北山型の分布地域は、山国庄・弓削庄・名田庄・朽木庄など中世の柚地系荘園を核とした来歴をもつ。土間が狭いこと、土壁ではなく板壁を用いることは、林業を営む山村住居に共通する傾向である。

北山型地域のなかでも、南丹市美山町は

草葺民家の宝庫である。とくに由良川流域の北・南・江和・下平屋・長谷などの集落では、妻入の古風な民家が点在し、稜線の鋭い草葺屋根や千木状の棟飾り、板壁を用いた外壁、草葺の小屋などが緑豊かな山々を背景に歴史的な風致を形成している。北地区は重要伝統的建造物群保存地区に選定されている(写真3)。

京都市北部の山間である洛北地域では、妻面を入った土間が狭く、そのぶん台所が広い板の間となり、中程に囲炉裏と竈を連結して築く構えがみられる。火を焚く設備を一箇所にとめることで暖房効率を高め、火処の周囲に家族が集まることで寒さ厳しい冬を暖かく暮らしてきた。

京都市左京区久多では、囲炉裏に座った家族の背後に太い大黒柱と重厚な納戸構え、戸棚を並べ、天井の力強い梁組とともに見応えのある内部空間を構成している。竈には立派な荒神さんを祀り、正月には囲炉裏の後方に歳徳さんを飾って台所に彩りを添えてきた。久多の周辺は、北山型の中でも特に長く妻入が存続した地域で、妻を入った台所の空間構成に格式性と装飾性が加味されてきたと考えられる。

京都市右京区京北では、草葺民家だけでなく、規模の大きなものも含めて、杉皮葺の民家と付属屋が数多くみられる。古くから京都に大量の材木をおさめた桂川水系の本格的な林業経営が杉皮葺の普及を促したのである。

北山型民家のなかでも、若干の地域色が認められる。

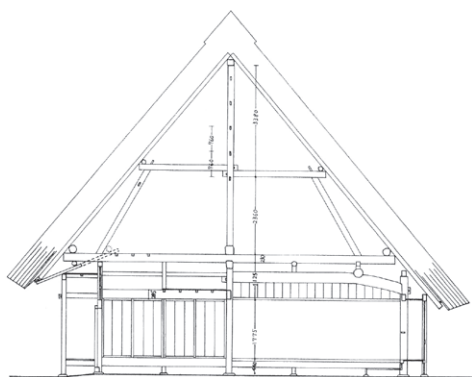


図5 新道家住宅(1796年)断面図
(京都府の民家 調査報告 第七冊)

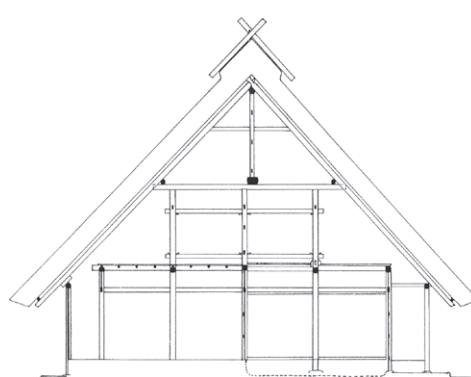


図4 木戸家住宅(17世紀)断面図
(京都府の民家 調査報告 第七冊)

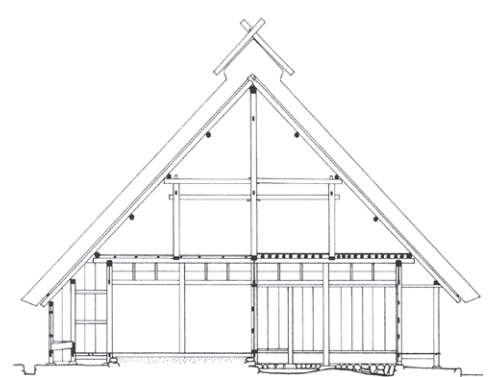


図3 石田家住宅(1650年)断面図
(京都府の民家 調査報告 第七冊)



写真5 旧岡花家住宅の大戸口



写真4 旧岡花家住宅の外観

一 北船井型の民家

北山型分布地域の西側、丹波中北部には北船井型の民家がみられる。北山型の一系統に属するが、外観は入母屋造・草葺で、妻入・平入ともにあり、平面は整形四間取りを基本とする。座敷・下の間・台所・部屋を田の字形に配し、土間の前隅に内廐、後寄りに竈や流しなど炊事設備を設ける。屋根の構造は棟束組が古式である。京都府下の民家で江戸初期から整形四間取りになるのは船井郡北部と南山城地域だけである。渡邊家住宅（京丹波町／17世紀末頃／重要文化財）はその典型的な建物である。

北船井型と北山型は構造形式が類似し、分布地域も隣接するが、北船井型は北山型にくらべて土間が広く、「上げ庭」があった形跡がないこと、土壁が多usedされ板壁が少ないことなどが相違する。農業の比重がより大きな生業形態を反映した民家形式と考えられる。

一 摂丹型の民家

摂丹型の民家は、摂津北部から丹波西南部、山城中部にかけて分布する。外観は入母屋造・妻入・草葺で、内部は縦半分を土間として、土間に沿って表から座敷・台所・部屋の3室を1列に並べる間取りを基本とする（図6）。座敷の前面には縁側を設け、半間以上の幅をもつ広縁とすることもある。土間の前隅には内廐、後寄りには竈や流しなど炊事設備を配する。軸組の構造は居室

の室境を成の高い差鴨居で固め、土間は太い梁を縦横に掛ける。屋根の構造は棟束組が古式で（図7）、次第に投首組が増加し、過渡期には棟束と投首を併用する形式もみられる。

旧岡花家住宅（綾部市／京丹波町より移築／17世紀末頃／重要文化財）は摂丹型屈指の古民家である（写真4）。その諸形式から摂丹型の祖型をさぐってみよう。旧岡花家住宅は妻入で土間に沿って3室を並べる典型的な摂丹型であるが、土間の奥に細長い室を設ける点は珍しい。内廐の外側をすべて壁で閉じること、正面出入口の大戸を外壁の外側で引くことは特異な形式ではあるが、江戸中期以前の摂丹型の古民家にしばしば共通する特徴である。

内廐の外側に戸口がないので、牛馬はいったん屋内の土間を通って大戸口から出入りしたと思われる（写真5）。また、一般に民家の出入口は内引きとし、戸を外で引くのは厩口だけである。これらのことから、摂丹型の大戸口は元来は厩口で、内廐はもとと座敷と直に接していたのではないかと推察されている。のちに内廐の一部に土間が通って妻入になってからも、しばらくは外引きの大戸口から人も牛馬も出入りしたのでないかと思われる。そのような経緯に起因するものであろうか、古い民家では座敷・土間境が板壁など閉鎖的な間仕切りで復原される。すなわち、摂丹型民家の祖型は、平入で、土間は台所の前に限られ、広い内廐が座敷と接する形態だったという推測に至る。

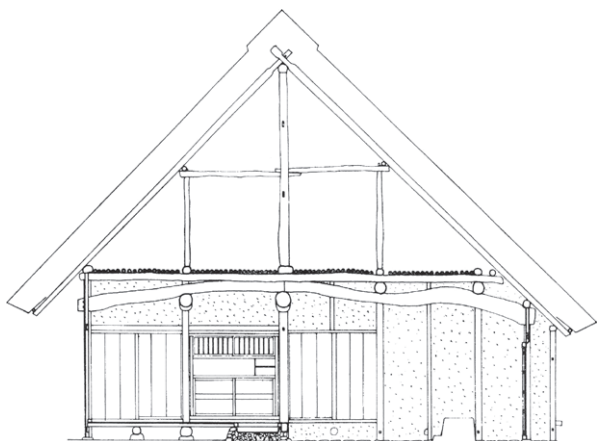


図7 旧岡花家住宅断面図
（重要文化財旧岡花家住宅移築修理工事報告書）



図6 旧岡花家住宅平面図
（重要文化財旧岡花家住宅移築修理工事報告書）



写真7 片入母屋造の背面外観(長岡京市史 建築・美術編)



写真6 角屋造の外観(京都府の民家 調査報告 第七冊)

では、摂丹型の妻入民家の成立背景はどのようなものだったのだろうか。摂丹型民家は、その分布範囲が細川管領支配領域と合致することから、中世末期に在地支配に携わった名主・地侍層の身分地位の建築的な表現として、妻正面に座敷と広縁、破風を配する格式的な構成が成立したと考えられている。地元では、摂丹型の妻入民家をホンヤあるいはコマイリ、それ以外の平入民家をヨコヤあるいはオオマイリと呼び分けることがあり、上層民家で妻入を保守する傾向がうかがえる。

摂丹型民家は、規模が大きくなると居室を2列に並べ、また角屋造と称して上手側面前寄りに座敷を突出する。入母屋の妻面を正面に向けて、上手に角屋の屋根がのびる外観は風格がある(写真6)。角屋造の発生は18世紀初期頃であり、時代が下がると寛政2年(1790)の遠山家住宅(亀岡市/重要文化財)のように主屋の庇と角屋を瓦葺とし、座敷まわりをさらに格式的に構成する形式があらわれる(図8)。

現在では、摂丹型の妻入民家より平入の草葺民家や瓦葺民家が多数を占めるが、平入民家は、四間取りなど摂丹型とは異なる平面形式をもつ。屋根構造は草葺の場合は棟束組から扱首組へ変化し、瓦葺の場合は和小屋あるいは登り梁を用いる。

平入民家の四間取りには、土間に沿って台所と部屋を並べ、上手に下座敷・上座敷を配する特徴的な平面もみられる。それらの民家では、もともと台所・土間境は開放、部屋・土間境は土壁で閉ざされていた。こ

の間取りは、京都市北郊の岩倉や京都府船井郡、亀岡市、大阪府豊能郡などで確認されており、当地域の平面類型の一つと考えられる。

京都市嵯峨野から乙訓にかけての洛西地域では、正面を入母屋、背面を切妻にする片入母屋造が散見する(写真7)。切妻側では妻梁を用いず、柱が直接に棟木や母屋を支持する場合があり、その構造をタテノボシと称する。現在は数が少なくなったが、かつては洛西の民家景観を特徴づける建て方であった。

亀岡市大井町では、京都府下では珍しく寄棟造の草葺民家が少数ながらみられる。平安時代の武將、渡辺綱の流れをくむという家筋の民家形式で、寄棟屋根につくるのは、鬼が入母屋の破風から入り込むのを防ぐ工夫だと伝えられている。特定の由緒をもつて継承されてきた民家のかたちとして注目される。

摂丹型の妻入民家は妻を、平入民家は平を南面させる建て方が通例で、妻入と平入では棟の方向が異なる。ほかにも角屋造や片入母屋造、寄棟造など多様な民家が散在し、長屋門を設ける屋敷構えもみられる。同じ系統に属する妻入民家と平入民家が棟を平行に並べて整然と建ち並ぶ北山型地域とはまた異なる変化に富んだ集落景観を展開している。

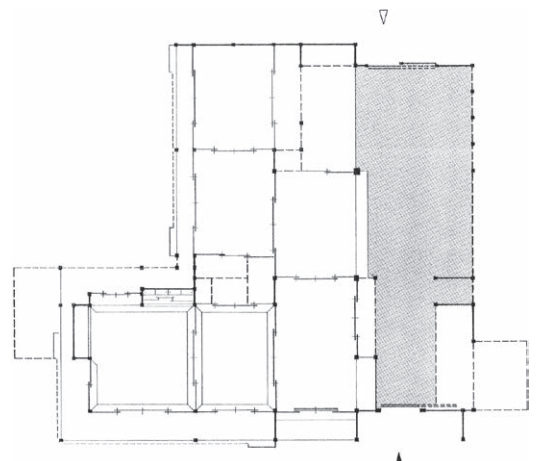


図8 遠山家住宅復原平面図
(新修亀岡市史 資料編第二巻)

●おもな参考文献

- 『京都府の民家 調査報告 第一冊～第七冊』京都府教育委員会、1966～75
- 『重要文化財旧岡花家住宅移築修理工事報告書』宗教法人大本、1974
- 『重要文化財石田家住宅修理工事報告書』京都府教育委員会、1975
- 大河直躬他『日本建築史基礎資料集成 2 1 民家』中央公論美術出版、1976
- 永井規男『摂丹型民家の形式について』日本建築学会論文報告集、1977
- 『重要文化財渡邊家住宅修理工事報告書』京都府教育委員会、1978
- 関野克監修『日本の民家 1～8』学習研究社、1980～81
- 『日吉ダム水没地区文化財調査報告書』日吉町役場、1988
- 『洛北の民家』京都市文化財ブックス第4集、1989
- 『美山町かやぶき山村集落 北・南、下平屋地区 伝統的建造物群保存対策調査報告書』美山町・美山町教育委員会、1990

南山城型(四間取り型)の民家と町家

中川 等



なかがわ・ひとし

大阪産業大学デザイン工学部准教授
京都市文化財マネージャー育成実行委員会委員
NPO法人古材文化の会副会長
NPO法人文化財修復構造技術支援機構理事
河内いえ・まち再生会議理事
専門／建築史、居住文化史
著書／『伝統的都市集住環境の空間秩序生成に関する研究』(共著) など



写真1 小林家住宅の敷地全景
(小林家住宅長屋門ほか四棟保存修理工事報告書)

南山城型(四間取り型)の民家

四間取り型の民家は、河内・大和・伊賀から山城南部にかけて分布する。外観は入母屋造・平入・草葺で、平面は整形四間取りを基本とする。床上は座敷・下の間・台所・部屋を田の字形に並べ、台所から土間に「広敷」という板間を張り出す。土間の前隅には内厩あるいは機部屋、後寄りには竈や流しなど炊事設備を配する。屋根構造は桷首組である。

1665(寛文5)年の小林家住宅(木津川市山城町/重要文化財)は南山城最古の民家である(写真1・2)。武士出身の旧家で、正面に長屋門を設ける格式的な屋敷構えをもつ。主屋はもと入母屋造・草葺であったが、のちに切妻造の高塀造に改められた。平面は整形四間取りを基本とし、

上屋柱の多くを1間間隔にたてること、小屋梁を折置き(柱の頂部に小屋梁をのせ、その上に桁をおく方式)に架けること、玄関・土間境の前寄り1間を土壁で閉ざすこと、台所・土間境の建具を突止め形式とすることなど古風な手法がみられる(図1)。高塀造は、本屋部分を切妻造の草葺屋根とし、塗り籠めた妻壁をたち上げて蟻羽に2列ほど瓦を葺いた造りである。竈のある土間部分と角屋座敷は瓦葺の落ち棟あるいは庇として取り付く。草葺屋根の端部、塗り籠めた妻壁をたち上げて瓦を葺いた部分を「高塀」と称し、高塀に面して瓦屋根を設けることで、竈屋土間は防火構造、角屋座敷は格式意匠をととのえる。高塀造は河内・大和を中心とした一帯にみられ、南山城は分布域の北限にあたる。入母屋造が一般的であった当地域にあつて、高塀造は18世紀に出現した。

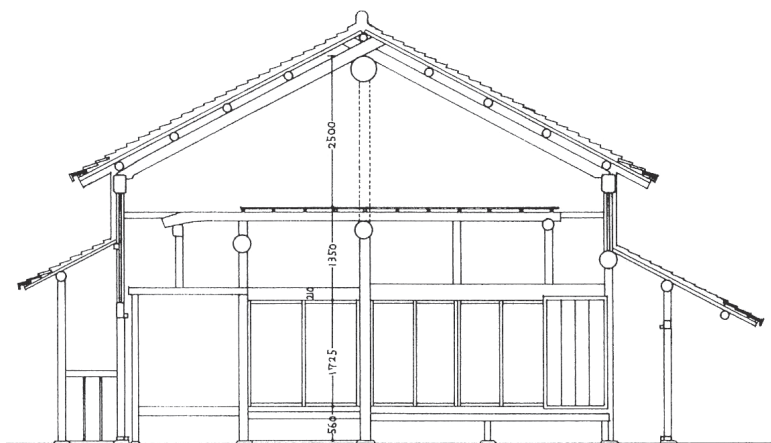


図2 旧近藤家住宅梁行断面図
(京都府の民家 調査報告 第七冊)

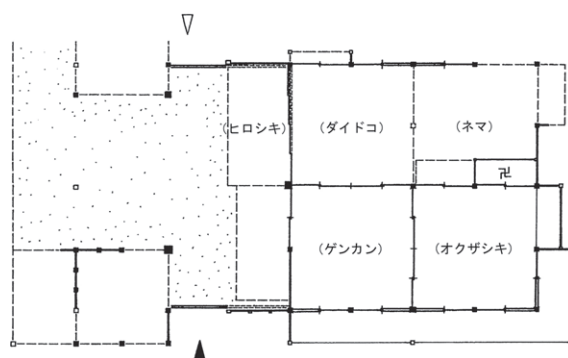


図1 小林家住宅復原平面図
(小林家住宅長屋門ほか四棟保存修理工事報告書)



写真3 澤井家住宅の座敷



写真2 小林家住宅の外観

南山城は京都府の農村部でもっとも早く瓦屋根が普及した地域である。府下で年代の明らかな最古の瓦葺民家は、1768(明和5)年の旧近藤家住宅(城陽市/現存せず)である(図2)。また、1781(天明元)年の河原村(木津川市加茂町)の村法度で小高(10石以下)の百姓が瓦庇付きの家を建てることを禁じていることから、18世紀後期には村法度で禁止するほどに普及していたと推察される。全国的には増田家住宅(和歌山県岩出市/1706年/重要文化財)が農村部における瓦葺民家の早い例である。

南山城の民家は、丹後・丹波の民家と比較して土間が広く、広い土間に発達した梁組がみられる。土間の中程にたつ太い柱から背面の側柱にかけて、「煙返し」という大梁を渡して、竈のある土間と居室側の土間を区切り、梁上部の土壁によって竈の煙が居室側に流れ込まない造りになっている(図3)。食事は、台所から土間に張り出した広敷で行われた。男性は土間に向かって広敷に座り、女性は土間に腰掛けをおいて台所のほうを向いて食事をした。女性の座席は、竈や流しにすぐに立って行けるので便利が良かったという。

民家の座敷はもとも先祖の霊をまつる室で、江戸初期から中期の上層民家では、しばしば書院風の座敷を別棟あるいは角屋として設けた。伊佐家住宅(八幡市/1734年/重要文化財)は、整形四間取りを基本として、床・棚・付書院を構えて長押をまわした書院風の8畳座敷を突出して設

けた(図4)。澤井家住宅(京田辺市/1741年/重要文化財)は、前身建物では主屋と別棟の座敷を付属したが、再建に際して角屋座敷として直接主屋に取り付く形式になった(写真3)。

南山城では、小林家・伊佐家・澤井家など大型民家がみられる一方、江戸中期から明治期にかけて三間取り・二間取りの民家が多かった。村全体の民家の間取りがほぼ判明する大野村『建家図面帳』(木津川市加茂町/1884年)によると、74戸のうち六間取り2戸、四間取り15戸、三間取り5戸、二間取り47戸、一間取り5戸で、二間取りが当時の一般的な住宅形式であったことがわかる。丹後・丹波と異なり、民家規模の格差が大きかったことも当地域の特徴である。

集落形態としては、中世に形成された環濠集落が少なくない。そのなかで木津川市山城町の上粕はもっとも大きな環濠集落で、東西330m、南北360mほどの規模をもち、戸数約300戸からなる。集落は旧奈良街道に沿って立地し、濠や竹藪、井戸が残り、長屋門を構えた民家や高塀造の民家が散見する。

城陽市寺田は、古代の条里制を踏襲して東西の街路を一町(約109m)ごとに配し、その両側に2列ずつ屋敷を並べる構成を基本とする。街路に面する前列の屋敷にはしばしば長屋門と土蔵を構え、街路に面さない後列の屋敷には街路から直角に路地(入り道)を設けて出入りする独特の集落形態を伝えている。

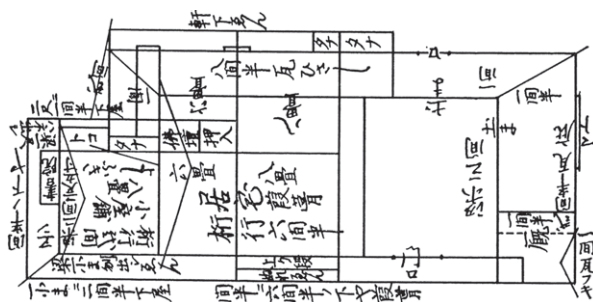


図4 伊佐家住宅普請願絵図
(主屋部分解説/伊佐家住宅(主屋)修理工事報告書)

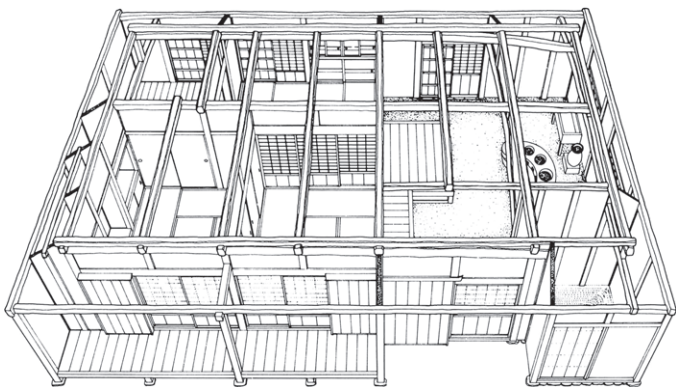


図3 旧松岡家住宅復原透視図
(加茂町史 第二巻 近世編)



写真5 杉本家住宅の外観



写真4 川北家住宅の外観

一京の町家・府下の町家

京の町家は、間口が狭く奥行の深い「鰻の寝床」という細長い敷地にたち、主屋はふつう切妻造・平入・棧瓦葺、表構えは千本格子・揚見世・通り庇・むしろ窓などからなる（写真4）。平面は、通り庭という土間に沿って表から店・玄関・台所・奥の4室を1列に並べる間取りを標準とし（図5）、間口が広い場合は居室を2列に配する。通り庭の奥には竈・流し・井戸など炊事設備を設ける。

表通りに面して店棟を構え、奥に平行して居室棟を建て、両者を玄関棟で接合する「表屋造」は京の町家の一到達点である。玄関棟の両側に中庭、居室棟の奥に奥庭をととのえ、建物と庭を交互に配置すること、奥行きが深い住まいに光と風、そして庭ごとの美しさと季節感を取り込む。夏になると建具をすだれや蓆戸など通気性の高いものに改め、畳の上に網代や簾簾を敷き、適所に打ち水をするなど、蒸し暑い夏を涼しく過ごす伝統があり、建物のかたちを生かした暮らしの知恵が継承されている。

杉本家住宅（京都市下京区／1870年／重要文化財）は表屋造の大型町家である（写真5）。奈良屋の屋号をもつ呉服店で、京で仕入れて関東で販売するいわゆる他国店持京商人であった。幅の広い床・棚を備えた座敷や独立した仏間の構え、15畳大に復される台所など大店の風格をもつ。庭園や茶室、土蔵、高塀も含めて町家の屋敷構

えをよく伝えている。祇園祭では伯牙山のお飾り場となり、人々にぎわう。

京都の市街中心部は、天明の大火（1788）や元治の大火（1864）など度重なる火災のため、現存する町家の大半は幕末以後の建物である。大正期頃には、主屋を表通りに直面させず、通りに沿って高塀を構え、前栽や通路を隔てた奥に主屋を配する造りが目に付く。高塀はふつう瓦屋根、瓦庇、出格子などから構成され、町並みの連続性に配慮される。年代や職種によって京の住まいは多様なかたちをみせながら、多様性と統一性をなじみよく調和共存させた景観を受け継いでいる。

市街の中心部では、町家が長く連綿する町並みはあまり残っていないが、西陣では織物業を営む家々の佇まいが保たれ、山鉾町では商家や町会所が町の活気を伝え、本願寺寺内町では仏具・仏壇・仏書の店や旅館が風情を添えている。主屋の脇に路地を設けて、細長い路地の奥に長屋建の借家を建てることも多く、地蔵をまつるなど趣深い空間を構成する。

市街の周縁部では、東山麓の寺社と門前町の産寧坂地区、洗練された茶屋が並ぶ祇園新橋地区、豊かな自然に囲まれた街道沿いの嵯峨鳥居本地区、明神川に沿った旧杜家町の上賀茂地区（以上、重要伝統的建造物群保存地区）、酒蔵と商家の町並みが残る伏見、街道沿いの門前町の鞍馬、街道沿いの宿場町の榎原など、必ずしも町家に限ったものではないが、地域の歴史を伝える景観と風致を継承している。



図7 瀧澤家住宅平面図
（瀧澤家住宅修理工事報告書）

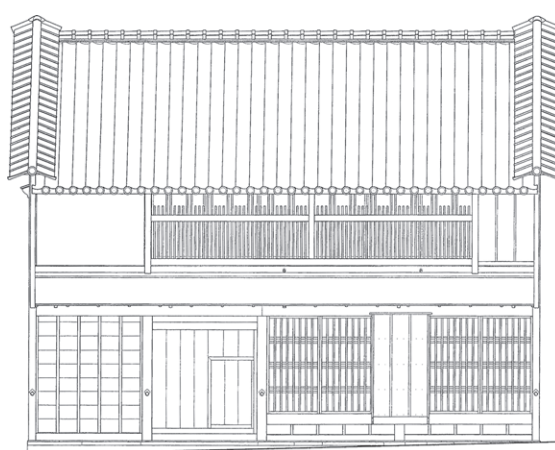


図6 瀧澤家住宅正面図
（瀧澤家住宅修理工事報告書）

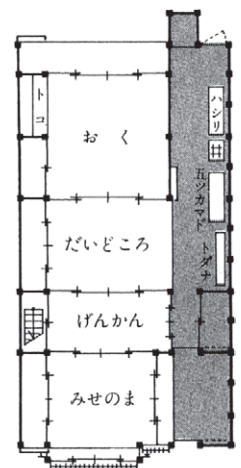


図5 京の町家の平面図
（日本の民家6）



写真7 須田家住宅の外観



写真6 亀岡市の妻入町家

瀧澤家住宅（京都市左京区／1760年／重要文化財）は洛北の鞍馬街道に面した旧炭問屋の家である（図6・7）。切妻造・棧瓦葺の屋根両妻に卯建をあげた古風な外観をもつが、当初は低い中2階で屋根・卯建とも杉皮葺であった。平面は通り庭に沿って3室を並べ、土間はやや広い。洛中の町家ではないが、建築年代の明らかな市内最古級の町家である。

府下では、宮津、西舞鶴、園部、亀岡、向日町など旧城下や街道筋に伝統的な町家と町並みが残っている。

宮津と西舞鶴は、日本海に面する良港で、城下町として発展、また海上交通の要地として栄えた。ともに廻船問屋や商家が軒を連ねていた往時の面影を伝える。旧三上家住宅（宮津市／1783年／重要文化財）は宮津城下有数の商家で、酒造業・廻船業・糸問屋などを営んだ（図8）。大規模な町家で、妻入の主屋を中心として、上手に座敷棟や表門、下手に釜場や酒造蔵などを配する。白漆喰の大壁や土戸など防火構造に徹した構えをもち、接客座敷や生業施設もよく保存されている。

丹波地方の旧山陰道に沿った城下や宿場には、妻入で正面に水切り庇を一、二段設け、妻壁を白漆喰などで塗り籠めた町家がみられる（写真6）。この形式の町家は、旧城下町である南丹市園部町や亀岡市などに残っており、ちょうど摂丹型妻入民家の分布地域と重なっている。現在の町並みは平入の町家も少なくないが、これは幕末以後の傾向である。むしろ窓や格子など共通

の要素をもちながら、平入の町家が続く京都の市中とはまた異なった町並みを展開している。

向日町は、西国街道と愛宕道、丹波道が合流する交通の要地として、また向日神社の門前町として発展した。須田家住宅（向日市／18世紀初期頃／府指定文化財）は、代々醤油の製造販売を営んだ（写真7）。当初は土間に沿って居室を3室並べる形式で、幕末期に上手列、明治期に奥座敷を増築した。登り梁を授首状に組む瓦屋根の古い構造を伝えている。富永屋（向日市／1735年）は、代々宿屋を営んだ旧家で、江戸後期の地理学者・測量家である伊能忠敬が宿泊するなど向日町の歴史を物語る文化資産である。

おわりに

京都府の民家は、丹後型（広間型）、北山型、北船井型、摂丹型、南山城型（四間取り型）に分類され、さらに町家を加えて6形式からなる。全国的にみて、一つの府域にこれだけ多彩な民家形式が分布していることは珍しい。それぞれの民家のかたちは、自然や歴史、社会など地域環境の中で、その地域ならではの特徴と魅力を育み、先人の知恵と経験を蓄積して、快適で豊かに暮らす仕組みを培ってきた。

地域の環境と共生し、文化を受け継いできた伝統民家の特徴と魅力に学び、今後の住まいづくり、まちづくりに活かしたいものである。



図8 旧三上家住宅正面図
（主屋部分／三上家住宅整備工事報告書）

●おもな参考文献

『京都府の民家 調査報告 第一冊～第七冊』京都府教育委員会、1966～75
大河直躬他『日本建築史基礎資料集成 2 1 民家』中央公論美術出版、1976
林野全孝『近畿の民家』相模書房、1980
関野克監修『日本の民家 1～8』学習研究社、1980～81
『重要文化財伊佐家住宅（主屋）修理工事報告書』京都府教育委員会、1982
『重要文化財瀧澤家住宅修理工事報告書』京都府教育委員会、1985
『京の住まい 地域の文化財としての民家』京都市文化財ブックス第8集、1993
『京都府指定有形文化財須田家住宅保存修理工事報告書』須田久重、1998
『京都府指定有形文化財三上家住宅整備工事報告書』宮津市教育委員会、2001
『京都府指定有形文化財（建造物）小林家住宅長屋門ほか四棟保存修理工事報告書』小林雅子、2002
『重要文化財澤井家住宅修理工事報告書』京都府教育委員会、2007